



少年メルダー隊通信

SHONEN MELDÖR TAI TSUSHIN

第23号

2015年

9月16日発行

貴之・友美 きんきゅう帰国

世界各地をとりまわる貴之と友美が、このたび日本にきんきゅう帰国した。少年メルダー隊の三人が、貴之と友美に昆虫軍団の「なぞの四怪人」についてきいたぞ！

友美「みんな、元気にしていたかな？」
みどり「はい！みんなでもいつもトレーニングもしているし、パトロールもばっちり。」
貴之「たのしいね。」
あけみ「みんなでキュピル怪人の研究もしました。」
貴之「怪人の研究？」
だいち「これまで少年メルダー隊本部に送られてきた、キュピル昆虫軍団との戦いの報告書をもとに敵の研究をしていたんだよ。」
貴之「それはすごい。」
みどり「だけど、昆虫軍団の島の中でたかかった四人の怪人のデータは詳しく残っていないの。」
友美「そうだったのね。」
あけみ「今日は、超音戦士メルダーが昆虫軍団のアジトで戦った四人の怪人の話をきかせて。」
貴之「よし、わかった。じゃあまずは、島の中で戦った昆虫怪人の写真を見てもらおう。」



カメムシキュピル

友美「まず、超音戦士メルダーが昆虫軍団のアジトの中に進むと、カメムシキュピルが行く手をはばんだのよ。」
だいち「赤と黒のしましまがあざやかなあ。」
貴之「カメムシキュピルの毒ガスこうげきはかなりのいりよくで人間がすいこむとおそらく、すぐ死んでしまうだろう。」
友美「超音戦士メルダーも、かなりくせんしたのよ。そこへホタルキュピルが加わったの。」
貴之「ホタルキュピルは毒ガスに苦しむ超音戦士メルダーを追いつめるように電げきこうげきをしかけてきたんだ。」

あけみ「ホタルって、あの夏の夜におしりがほわんと光る、ロマンチックな昆虫でしょう？」
貴之「本来、ホタルの光は発光物質によるもので電気によるものではないんだ。しかしこのホタルキュピルはホタルの発光器の仕組みを改良して電気をうみだしているようだ。」
だいち「ホタルキュピルの左手がびかつと光っているね！」
友美「カメムシキュピルとホタルキュピルは技は強力だったんだけれどそのぶんパワーはおとっていたの。」
貴之「メルドプラックのメルドストームがさく



ホタルキュピル

れつして、アジトのかべに叩き付けられ、弱った怪人たちを、メルドパンチ・メルドチョップで倒したんだ。」
みどり「そのあとにできたのがバツタキュピルとノミキュピルね。」
だいち「バツタキュピル、面白い顔だなあ。」
あけみ「でも大きなアゴが強そうよ。」
貴之「そう、バツタキュピルの大あごはいろんなものをかみちぎる強い力がとくちようなんだ。」
超音戦士メルダーのメルドスーツにかみつかれてそのあとが少しのこつたんだよ。」
だいち「うひゃあ。メルドスーツはだいいじょうぶだったの？」
友美「特別な方法で作られているの。そうかたんにはこわれたりしないのよ。」
あけみ「ノミキュピル



はどんな怪人ですか？」
友美「もともと、ノミという昆虫は体長の60倍の高さまで飛べるの。」
みどり「すごい！」
友美「ノミキュピルはその能力を高めた怪人だ

つたの。とにかく飛びはねてすばしっこい。」
貴之「さらにバツタキュピルとノミキュピルはすばやさとジャンプ力を生かしたコンビプレイで戦う怪人だった。目にもとらぬはやわざで超音戦士メルダーをほんろうしたんだ。」
だいち「にんじやみたい

バツタキュピル

ち向かっていく貴之に「ちやんや友美おねえちゃんもすごいわ。」
貴之「でも、安心しちゃうられない。超音戦士メルダーには、まだやらなければいけないことがたくさんある。ぼくたちにね。」
だいち「世界で色々な事件がおきてるってきいたけれど、なぜ日本に帰ってきたの？」
貴之「いったん日本に帰ってきたのも、世界で起きている事件と関係があるんだよ……。」
だいち「にんじやみたい

だね！超音戦士メルダーはどのようにして戦ったの？」
友美「メルドレッドがメルドフレイムをはなつたの。メルドフレイムの炎にひるんだいっしゅんのスキをねらってメルドキックで倒したのよ。」
だいち「怪人たちも超音戦士メルダーにかかれればバツタンキューだね！すごいや！」
貴之「あとは、君たちも知っているとおろさ。」
あけみ「たっさんの怪人をうちたおしていくなんて、超音戦士メルダーはやっばりすごいね。」
みどり「キュピルに立



ノミキュピル